



浮萍 一道 開く

● NPO法人ホップ
障害者地域生活支援センター

代表理事 竹田 保

新型コロナウイルス感染症が発生してから、今年で4年目になろうとしているが、感染者数の山谷が繰り返し発生し、終息の訪れがいまだに見えない。昨年もコロナ禍のなかで、人との関わりが密にならないように意識的に過ごす日々が続いた。1月にはコロナウイルス変異によるオミクロン株の感染拡大への対策に振り回されたが、2月には様々な課題が指摘されながらも北京オリンピック・パラリンピックが開催され、日本選手の活躍に一喜一憂していた。とりわけ、カーリング女子の試合後のインタビュー中の驚きと素直に喜ぶニュースには、代表選手が道民中心という親近感もあり、ほっとさせられた。

いつの間にか2023年も始まり、札幌では雪まつり会場の準備を進める時期となった。年が開けても、連日のように事件事故の憂鬱なニュースを目にすることが多く、ロシアのウクライナへの侵攻も未だに終息の糸口が見えずにいる。今回のウクライナへの侵攻では、多数の民間人が犠牲となり、戦争により生み出された障がい者も増え続けている。コロナウイルスもウクライナ侵攻も収束し、世界が平和と安心を取り戻し、2023年が明るい話題になることを希望したいと思う。

去年は、縁あって障がい者団体の業務に新たに携わることとなり、慌ただしく過ごす日々が多くなった。幼少期に20歳まで生きられるのは難しいと言われてから、既に50年が過ぎ、還暦を超えて、いつの間にか年金受給に、手が届きそうな年齢になってきた。また、数年先のことは言え、定年退職、年金生活という同年代と同じような普通の老後をむかえるまで働き続けてこれたのは奇跡と言えるのかもしれない。

幼少期に長くても20歳まで生きているのは

難しいと聞いてからは、できることは出来るうちにしておきたいと考えるようになった。将来の目標を立てて着実に日々過ごすというよりは、その日その日にできることをして過ごせればと思いつつ暮らしてきた。今日一日、あと何時間が過ごせば、と思いつつ、その時々自分なりに過ごし、気づいたら、40年が過ぎた。

22歳の時に、就職してから今日までの40年。この間、転職、職探しと暇な時期もあったが、周囲の支えもあり今日まで働き続けることができた。働いている間は仕事に専念し、なんら心配がなかったかといえば、そんなことはない。働くことで本来なら利用できるサービスを受けることが出来なくなり、ボランティアを探して生活を維持していた時期もあった。

働き始めた当初は、今のような福祉サービスを受けることもなく、気合と辛抱で乗り切った時期もあった。出勤してから退勤まで、排泄を我慢しながら、冷や汗を流していたことも度々あった。そんな時に、好きで我慢していることを自分に言い聞かせ、今日一日のことだと思いつつ、将来を考えるとなく過ごすことで、やり過ごせたのだと思う。

働きながら、ヘルパーを利用できる日が訪れるとは思えなかったが、40年間、この間の社会の変化、環境の変化は著しく、働く障がい者のヘルパー利用が認められ、介助の必要な重度障がい者の働く環境が整ってきた。着実に変化によって、過ごしやすくなってきていると感じる。

コロナも4年目となり、重度障がい者が陽性となった時の入院中の対応も含めて、本格的に行って欲しいと思う。医療と介護の複合的な支援がないと廃用症候群による障がいの重度化を招くことになる。高齢者、基礎疾患、重度障がい者を見据えた医療環境の整備について社会全体の合意形成が進み、支援が充実することを願っている。

思いや願いを声に出して、伝えていくことで変わることもある。今年は、独り言を、少し大きな声で言ってみようと思う。